

社会と仏教：福祉思想を媒介として

研究員 松岡佑和



仏教の現代的意義を問う際、社会と仏教との繋がりの中で、仏教がどのような位置を占め、どのような役割を果たすかが問われます。前近代社会では、宗教のあり方がその社会のあり方を規定する一つの考え方となっていました。国家と仏教の関係、人々の信仰など、それぞれを媒介にして、人々の行動様式に影響を与えていたことでしょう。しかし、日本では宗教離れが進み、多くの人々の日常生活において、仏教を意識する機会は少なくなってきました。

社会と仏教の繋がりを考える中で、私たちの日常生活に大きな影響を与える経済の関係は重要です。しかし、仏教が経済を促進させる役割が明確に確認できないため、資本主義下を前提とした社会科学において仏教がその議論の俎上にあがることは限定的です。一方で、資本主義下で生じる社会問題への解決方法の一つとして仏教の社会的意義が語られてきたのも事実です。主として社会福祉問題の文脈で語られ、仏教教義から導き出された思想・行動倫理を現代社会に適用しようとするものである。これらは仏教福祉、仏教社会福祉と呼ばれます。

原始仏教より、利他的行為の前提となる「慈悲」「慈善」の概念が存在し、直接的・間接的に人々の行動倫理が説かれています。それらを現代社会に適用するのが、仏教福祉、仏教社会福祉です。仏教学者、社会福祉学者など、それぞれの学問的見地から様々な視点で語られています。現代社会の諸問題に対して、根拠を持った行動倫理を抽出する思想としての仏教福祉思想は、大きな役割を持つものと考えられます。

重要な視点として、福祉思想を考える場合には社会を前提としなければなりません。現代社会と異なる社会で提示された福祉思想がそのまま現代社会で適用できるとは限りません。これらの点を踏まえ、仏教福祉思想の再解釈が必要でしょう。今後の方向性として、仏教徒を通じた仏教福祉思想研究があります。現代社会を生きる仏教徒を通すことで、現代社会を自然と前提とすることができます。近代以降の仏教者の仏教福祉思想研究もされていますが、そこでは実践者の思想が重視されています。実践を通じた福祉思想も重要ですが、今後はより範囲を広げ、思想そのものをあらためて整理する必要があります。そして、現代社会に生きる私たちの「しあわせ」に、仏教福祉思想がどのような示唆を与えてくれるかを問い、社会と仏教の接点を考えていく必要があるでしょう。